
見えない恋の行方

蘇羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

見えない恋の行方

【Nコード】

N1322B

【作者名】

蘇羅

【あらすじ】

中学生の彼と彼女がおくる三年間悩みを抱えた彼女を彼はいったいどうするのか

出会いと悩み

いつからだろうあの子のことが気になりだしたのは。

入学して同じクラスの隣の席に着いたその子はとても無口だった。

最初の一週間ぐらい誰が声をかけても話そうとしない。

そして二週間目彼女は休んだ。まだ制服の大きさがあっていない僕たちは気にも止めなかった。

そりゃそうだ先生は風邪をこじらせたと言っていたからだ。

そして先生は終礼の時にどうやら僕の家が彼女の家に近いためプリントなどを届けるように言われた。僕はプリントをポストに入れて帰るつもりだった、しかし家の前で彼女にあってしまった。

僕は彼女に

「どうしたの」

と聞かれてしまったプリントを届けるように言われたと言ったら彼女は

「そう」

と素っ気なく答えた。

僕は少しムカつとした。

せっかく届けに来たのにあまりにもふてぶてしいからだ。

そんな感情を内にとどめて彼女にプリントを渡した。

それを受け取った彼女の手は白かった、そして手首が傷ついていた。

僕はリストカットの跡を見たのが初めてでなんで彼女の手がそんな傷ついているのかまったくわからなかった。

そして僕はつい彼女に聞いてしまった

なんで手首がそんなに傷ついてるの、と

彼女は驚き手を引つ込めて胸の前に抱えた

「みえたのね」

と彼女は僕におどおどと聞いてきた。僕はごめんと謝った。

彼女は落ち着いて

「うっんいいの私小学校から友達が少ないていじめられてて自分を傷つける事で落ち着いたの。最近はやめてたけどね」

と事実を話してくれた。僕がどう反応していいかわからずうつむいていたら彼女が

「寒いしあがつていく？」

と聞いてきた。

僕にとっては思いがけない言葉そして少し迷いじゃああがらせてもらうと返事した。

二階にある彼女の部屋はがらんとしていた決して物が無いわけではない物はあるけれど部屋が広いのでそういうイメージを持ってしまうのだ。

「その椅子に座っててお茶持ってくるから」そういうと彼女は一回におりて行った。

僕はむちゃくちゃドキドキした同年代の女の子の部屋に入るのは初めてで何を話せばいいかもわかんない。

そうやって考え込んでいると彼女が部屋に入ってきた。

彼女は無言でコップを二つ机の上に置いてくれた。

そして彼女が僕の前の椅子に座った。

僕は話すことが無いので下を向き、そのまま5分ほど時間が過ぎていった。

すると彼女が

「あなたは学校おもしろいと思う？」

と突然聞いてきた。

僕は新しい友達ができたとでもおもしろいよ。と答えたそして僕は続けざまに

君は学校楽しくないの？と質問をした。

「全然楽しくない勉強も友達関係もまったくおもしろくない」

彼女は立ち上がりどなるように喋った。僕は啞然として彼女を見上げていた。

そして彼女は

「ごめんついどなったりして」

と椅子に座り謝った。

僕は、別にいいよいきなりだったからちょっと驚いただけ、とすぐに謝罪を否定した。

「でも本当に学校はつまんないのやることがないし」

そして彼女はうつむき

「話すことができる友達がないから」

と言う彼女の目からは涙が流れていた。僕はとても悲しくなって今にも涙がでてきそうだった。

彼女は泣きながら

「あなたには友達がいるけど私にはいないの笑い合えないし悩みもうちあけない」

と小さく呟いた。

僕はその時 僕が今日から君の友達になるよ の一言が言えなかった。僕はうつむいて黙り込み何も言えなかった。

彼女は泣き僕は黙り込み時計は6時を指していた。

出会いと悩み（後書き）

どうでしたか初めて書いたんで自信はないですが悪い所があったら
してきしてくださいね

甘くてしょっぱい一時

あの日僕は彼女の悩みと涙を見た。

それは僕の悩みにもなった

どうにか僕に力になれないか悩みに悩んだ。

しかし答はでないあの日の夜僕は寝ずに悩んだのに解決の案は全く出てこなかった

そして次の日も彼女は学校に来なかった。

僕は自分のせいで来なくなったのかなと思った。

しかし確かめるのが恐かったプリントを届けたが結局話さずに僕は帰ってしまった。

そして彼女が一週間の間学校を休んだその日僕は彼女と話すことを決心した。

プリントをいつものように届けにきた。

そして僕はインターホンに指を伸ばしゆっくりと押した

しかし返事が全くないもう一回インターホンを押してみる

だがまた返事はない

僕は内心ほっとしていた

やはり彼女と話すのはめっちゃ怖い。

何を言えばいいかわからないしもし逃げられたりしたら僕は立ち直れないだろう。

そんなことを考えながらポストにプリントを入れその場を立ち去ろうとした。

すると後ろでドアの開く音がした。

そして中から彼女がでてきた。僕は黙って見ていると彼女はポストからプリントを取り出し僕の方を見た。

そして彼女は僕に

「ありがとう、また上がっていつてくれる？」

と聞いてきてくれた。

正直驚いたこの間あんな事があつたのに僕を家に入れてくれようとしたからだ。

僕は 本当にいいの？またあんな事になったら とまたうつむいてしまった。

「いいのこの間は私が悪かったのだからまた上がっていつてお願い」と頼み込んできた。

僕は断る理由もないし頼まれたらさすがに断れないので

なら上がらせて貰うよ と前と同じような返事で家に上がらせて貰った。

今日は彼女の部屋ではなく一階のリビングに通された。

彼女の部屋みたいにだだっ広い感じだった。

彼女は台所の方にいき冷蔵庫から飲み物といちごのショートケーキを出してくれた。

今日は2人がソファに隣あう感じで座っていた。

ソファは大きかったから窮屈な感じはしなかったがやっぱり女の子が横にいと落ち着かなかった。

そして話すことが思い浮かばなかったので取りあえずケーキを食べることにした。

すると彼女の落ち着きが急になくなってそわそわしだした。

僕はケーキを飲み込んで どうしたの？急にそわそわしてと聞いてみた。

すると彼女はもじもじと

「今のケーキどうだったおいしかった？」

と恥ずかしそうに聞いてきた。僕は彼女が作ったんだろうなと思うんおいしかったよもしかして君が作ったの？と聞いてみた。

「うん自分で作ったの人に食べて貰ったの初めてだからおいしいって言われてよかった」

と笑顔で答えてくれた。

彼女の笑顔を見るのはたぶん初めてだでもなつかしい感じがする。
自分の記憶の奥深くうる覚えな幼少時代同じような笑い方を見たよ
うな気がした。

たぶん気のせいだろう

僕は彼女に 君は笑顔の方がいいよかわいい と本年を彼女に言っ
てみた。

彼女は真っ赤になり

「本当？本当にかわいいと思うの」うん僕は君がかわいいと思うよ
それで出来れば友達になつてほしいなあゝと思つて

この間ちゃんと言えなかつたしなつてくれる？

「本当にこんな私と友達になつてくれるの？」

と言うとうつつむいてしまった。

僕は もちろん、だつて君のこともとつと知りたいし僕のことも知っ
て欲しいんだ となんか芝居がかったような言葉を言つた

彼女は顔をあげて

「ありがとうじゃあ私とあなたは友達ね」

と嬉しそうにまた笑つてくれた。僕も嬉しくなり笑つた。

そしてその日僕は彼女の家庭のことを聞いた。両親とも働いていて
父も母も彼女が寝てからしか帰つてこないらしい。

ご飯は自分で作るのがほとんどだが時々出前も取るらしい。

朝少しだけ話す時間があるが2人とも仕度に忙しくちゃんとは話し
てもらえないらしい。

そんな環境から彼女は友達をつくらず自分の殻に閉じこもりそして
自分を傷つけていったみたいだ。

僕はいつの間にか泣いていた僕の家庭は父さんしかいないけどもつ
と僕にかまってくれる。

休みになると遊んでだつてくれる。それなのに彼女の家は居るのに
まるでいないような幽霊一家みたいだ。

僕は彼女が話し終えると

今日はもう帰る家で考えることができた　と言って彼女の家を後にした。

その日の夜僕は前とは違い眠っていたまるで死人のようになぐつと。

幸せな僕の不幸 } b a d d a y } (前書き)

すいません更新全くしてませんでした。これからがんばって書いていくのでよろしくおねがいします

幸せな僕の不幸　bad day

次の日の目覚めは最悪だった。頭が痛い気分が悪くて今にも吐きそうだ。今日は学校を休もうかなと悩んでいたとき家の電話がなった。父さんはもう仕事に出て行っているため家には僕しかいない僕は仕方なく電話に出ることにした。

『もしもし』いつものように電話に出たが向こうからの返事は全くない。

僕はいたずらかと思い電話を切ろうとした。

するとやっと電話の向こうから小さな小さな声がしてきた。

「あのっ私。朝忙しいのに電話してごめんなさい」

電話は彼女からのものだった。『あっ朝からどうしたの?』

僕はめちやくちや驚いていた。朝から彼女から電話がかかってくるなど予想外だったからだ。

「えっとその・・・」

彼女はもしもじと何かを言おうとしていた。

「迷惑じゃなかったら私と今日一緒に学校に行ってもらえませんか?」

やっとの事で彼女は僕に伝え終えて僕の返事を待っていた。

正直返事に迷った今日はしんどくて学校に行かないつもりだったからだ。

だが彼女がわざわざ誘ってくれたのだ断るのも嫌なのでどうしてもしんどかったら早退することに決めた

『いいよ何時にそっちに行けばいい?』彼女にそう言うとうれしそうに

「ありがとっ、じゃあ8時ぐらいに来て貰っていい?」

と言ってきた。「わかった八時だねじゃあ迎えに行くから待っててねばいい」

と返して電話を切った。

「さてとしたくするか」っと一人でつぶやいた

朝食をとり着替えたりしてゐるあいだに約束の時間に近づいていた。

僕は約束の時間より少し早いが迎えに行くことにした。

『戸締まりはよし、さてと行くとするか』と言って僕はまだ寒い表に出ていった。

僕は音楽を聞きながら彼女の家までの最短ルートを通っていくことにした。

そして彼女の家に着いたのは7時50分で予定よりだいぶ早く着いてしまった。

『だいぶ早く着いちゃったなあーどうしよう』っと考えたが外で待っていても仕方がないのでインターホンを押すことにした。ピンポン・・・静かな通りに響いた音は僕の耳にしっかりと聞こえた。しかし返事はないもう一回押してみようかと思ったとき彼女がドアから出てきてくれた。

「ごめんなさい、もうちょっとかかりそうなのがあつてもらっている？」そう言った彼女はとてもかわいかった長い髪を無造作に垂らして長袖にＴシャツに七分丈のズボンをはいていた。僕は見とれていたら彼女が

「どうしたの？」

と聞いてきたので僕はあわてて何でもないと行って玄関まであがらせてもらった。「ごめんなさいねすぐ着替えてくるから座って待ってて」

つと言つて自分の部屋に戻ってしまったそして僕は10分ほど彼女を待っていた体調は最悪だが心はかなりスッキリしていて清々しい。少し寝かけていたら

「お待たせ、ごめんね」

と彼女の声が後ろからかかつて僕は驚いて彼女の方をみた。

そして彼女の姿を見て僕は啞然とした。さつきも啞然としたが彼女は制服がめちゃくちゃ似合っていた。

僕がボオーツとしていると彼女は

「早く行こつか」

と一声かけて僕は『うん』と返事して彼女の家からでて学校への通学路を歩き始めた。

今日は少し冷たい空気が心地よい、横を歩く彼女の横顔が白くきれいで話しかけるたびに笑ってしまふ。僕は彼女と一緒にいるだけで良い、それだけで幸せになる。この時、僕は初めて人に恋をした自覚はないけれど今考えてみるとこの時だろう。

この日、僕は学校で彼女と少し話したけれど彼女は僕以外の人とは話そうとしなかった。

そして三時間目の体育の時、僕は気分が悪くなり倒れて保健室に運ばれてしまった。意識はウッスラとだがある・・・けど気分は最悪だ何にも考えたくないただ寝ていたい。水の中につかっている感じだ心地よい。

けど何かが足りない…………

分からないけどなぜか悲しい、たぶん夢だろうけど嫌な気分だ早く目覚めたい彼女がいる日常に。

そして僕は白い壁の部屋で目覚めた、たぶん病院だろう吐きそうで気分は最悪なのに頭はスッキリしている。

『僕倒れたんだよな』と一人でボソツと呟いた。

周りには誰もいない一人つきりだ。

すこし寂しくなり何時かも分からないので取りあえず時計を探すことにした。

時計はすぐに見つかったベッドの横の棚のところに小さい時計が置いてあった。

『4時15分か』外の暗さからして夜中なのは間違いないだろう。

僕はトイレに行きたくなりベッドから起き上がろうとした。しかし起きあがったのは良いけれど腕に点滴が刺さっていたので動くことができなかった。

『どうしよこのままじゃ動けないや』僕はどうしようか考えながら周りを見渡してみた。

そして僕は驚くものをみた。僕のベッドから少し離れたところに彼女が眠っていた。

『えっなんで』と素っ頓狂な声をあげてしまった。

もう夜中なのに彼女が僕の隣にいる。

それも制服のまま小さく寝息をたて、まるで衝動物みたいだ。

僕は起こそうかどうか悩んで動けないのでそっとしておくことにした。

そしてまた目を瞑りゆっくりと眠りに落ちていった……………

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1322b/>

見えない恋の行方

2010年12月16日15時41分発行